



知って得する、ちょっと差がつく トリビア・コーナー

トリビア研究家 末崎 孝幸

末崎 孝幸氏

1945年生まれ。1968年一橋大学商学部卒業、同年日興證券入社。調査部門、資産運用部門などを経て、日興アセットマネジメント執行役員(調査本部長)を務める。2004年に退職。FACEBOOK上での氏のトリビア投稿は好評を博している。



100万ドルの夜景

写真は六甲山からの神戸の夜景

「100万ドルの夜景」という言葉は、1953年に電力会社幹部が神戸の夜景について「六甲山から見た神戸の電灯の電気代」に絡めて命名したのがきっかけ。当時山頂から見える神戸の電灯の数を計算すると、約500万個。その電気代は1か月で4億円弱、当時1ドル=360円だったので、ドル換算すると100万ドル超になったという。



なお、「函館山から見る函館市の夜景」、「六甲山(摩耶山)・掬星台から見る神戸市・大阪間の夜景」、「稻佐山から見る長崎市の夜景」が日本三大夜景とされている。



人民の人民による人民のための政治(リンカーンの演説)

意外に思われるかもしれないが、リンカーンの演説は最初は無視されていた。国立戦没者墓地の奉獻式において1863年11月、南北戦争の激戦地ゲティスバーグでリンカーンは演説を行った。エヴァレット上院議員が2時間にわたって大演説(基調演説)したあとである。

リンカーンの演説は低い声でつぶやくようで、(マイクロフォンのない時代でもあり)聴衆はほとんど聞き取れず、しかも2分という短いものだった。「人民の人民による人民のための政治」という名言もまったく無視されたままだった。



しかし、たまたま書き留めていた記者がのちに記事にして有名になったのである。

1946年、GHQ最高指令官として戦後の日本占領の指揮を執ったマッカーサーは、GHQによる憲法草案前文に、このゲティスバーグ演説「人民の…」の一節を織り込んだ。この一文がそのまま和訳され、日本国憲法の前文の一部となっている。

・日本国憲法前文(部分)…そもそも国政は、国民の厳粛な信託によるものであつて、その権威は国民に由来し、その権力は国民の代表者がこれを行使し、その福利は国民がこれを享受する。

三面記事(の由来)

明治初期の新聞はページ数が少なく、四面構成が一般的だった。一面が広告、二面が政治・経済、三面が事件、スキャンダル等社会の出来事、四面が小説・文化記事という構成であった。ここから新聞の社会面を「三面記事」というようになったのである。

特に明治25年に黒岩涙香が創刊した萬朝報(よろずちょうほう)は、こうした傾向が強く、社会で起きた殺人、事故などのセンセーショナルな記事を、三面で取り上げたことから「三面記事」という言葉が定着したといわれている。



長期投資仲間通信「インベストライフ」

蛇足ながら…萬朝報は黒岩の死後、凋落の一途をたどり昭和15年に廃刊となった。なお、「萬朝報」は「よろず重宝」のシャレである。

指きりげんまん

子どもの頃「指きりげんまん、嘘ついたら針千本の～ます」と約束を交わすときに使っていた言葉はご存知だと思いますが、いったいどういう意味なのだろうか。

「指きり」は、その言葉通り「指を切る」という意味だ。これは遊女の言葉から由来しており、惚れた男のため、嘘いつわりない愛の証しとして「自分の小指を切って贈る」という意味がある。

また、「げんまん」は、漢字で書くと「拳万」。拳で一万回殴るという意味だ。「指を切る」とか、「一万回殴る」、「針千本飲ます」など、この約束ごとの裏には何やら怖ろしい意味が込められているのである。

置いてけぼり(置いてきぼり)

「置いてけぼり」は、江戸本所七不思議のひとつである「置いてけ堀」の古事に由来し、置き去りになる意で使われる。

江戸本所にあった釣りで賑わう池で、堀で釣った魚を魚籠に入れて帰ろうとすると、堀の中から「置いてけ～、置いてけ～」という声が聞こえた。魚を全部返すまでこの声がやまなかつたという。この堀の場所





長期投資仲間通信「インベストライフ」

は、東京都墨田区錦糸町あたりの「錦糸堀」が有力とされている。

なお、近年は「置いとけぼり」が転じて「置いてきぼり」を使う人が増えている。

(参考)宮部みゆき著「本所深川ふしき草紙」(新潮社)